

住民と行政の「まるごと支援」を 宮本 島根大学 教授が記念講演



県社保協は16日、定期総会を開きました。島根大学の宮本恭子教授が記念講演し、短小社会

住民と行政が連携して「と支援」が時代の要請だと課題に取り組む「まるごと支援」が時代の要請だと訴えました。

268回目の金曜行動

3月8日、県庁前で268回目の金曜行動が行われました。「原発ゼロだ、今すぐゼロだ」とコールしながら、中国電力島根支社までパレードしました。

「本気の共闘」で安倍政治に終止符

春風とともに、一斉地方選挙はいよいよ本番。参院選とひと繋がりの大勝負です。「絶対にあきらめない」という強い意思に結ばれた共闘がどれだけの力になるか。

熱血・弁護士 にひ 仁比 参議院議員 の Hotレポート

「1995年の少女暴行事件は、親が我が子のような犠牲者を二度と出してほしくない」と訴えて明るみになり、県民が怒りに燃えた。基地に逃げ込んだ米兵



藤野衆院議員と全司法労組と懇談(3月11日、国会内)

地を這う候補者活動展開

よし子さんが衆院候補者になった当時は、島根選挙区(定数5)は、竹下登、桜内義雄、細田吉蔵、大橋武夫という大臣経験者で占められていた。こうした自民党代議士の一角に、新人のよし子さんがどうしたら食い込むことができるのか。様々な作戦が練られたが、党と後援会を大きくしていくためにも、まずは「中林よし子」の名前の浸透が必要となった。

広い県内の山あい、漁村をくまなく

当時、新調した党宣伝カーに「中林佳子の街頭演説」の看板が取り付けられ、専属の運転手が配置された。県下59市町村(当時)のすべての役場、学校、農協、漁協などを訪問し、時間の許す限り、人が数人でもいれば、その場に宣伝カーを停めて街頭から演説する。しかも、夜には毎日小集いや囲む集いが開かれた。

元衆議院議員(4期9年)

よし子さんを語る

「必ず議席取るので記事大きく」地を這う候補者活動を時々、新米記者が取材することになった。当時、赤旗の地方版は中四国9県版で、各県に専任通信員が配置され、中四国紙面をこの衆院候補が飾るのか競っていた。高知の山原健二郎議員は唯一の現職なので、記者会議では高知の通信員は「現職優先」を主張。「中林さんも必ず議席を取るのだから、拙い記事しか書いていないのに若気の至りでゴリ押ししたのを覚えている。(つづく)」



■衆院選第一声でマイクを握る中林さん。このときの選挙で初議席を獲得する。